職人歌合 上

特279-206
1200501132100
特279
:06

始

特279
206

昭和文庫

あられ花月川の渕もけふ
渕とり現とさいつ蒼いめうと思くを
うつきそ蒼ねぬ世そ戸蒼生
の宿すあ水野家蔵書之印とのっんこるんまく
ふりを蒼ま思ひ中ま温数
新を知ていふ中る云を思ひ出
いにまるかたかたかたいて

正宗文庫

ふりこたるさくらひらうなくゝ東わらの
のゝはるすきこゝのわゝをすめかゝ
を雪こゝろみて花ゝゝりとつゝひらゝを
吾いろをぶ君自ゝうゝむひてあゝゝ
るひをすむ多は端重せゝゝゝの
ゝもふゝゝゝぬゝあゝけやむこゝと
ゝゝゝん男ゝゝいな舟のいゝゝ伊

ゝんゝいゝゝゝゝゝむ雅俗はのようや
ゝゝゝゝゝゝゝぬゝゝゝゝゝゝゝゝゝの
東にゝゝ山の井のゝゝゝゝんゝゝて
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝふ
ゝん文化五年の夏五月中の吾
伊勢のゝゝて　篠原泰周

まつでうと申ひとる武蔵くの人とも通歌して相いのらん
くきをうやうやしくそなへぶまつ世事の古今事史
ゐて、ちかひ吹ぶ月ふきとくとてあひ
るいとそ申し歌をる人くハ佛乃、ち人の板ぶようて光
なるもしろおしきてひざいて紀ぶでぬとこもり祈ふんを
ふ[illegible]て世のまとひ[illegible]ちもふ[illegible]ふてとこのこれ[illegible]
なをしらんせるぶきちとめ[illegible]ぶこつ[illegible]ふもいのまに[illegible]
ゆこいひくおまつうぶすどもと志ぶれる春ぶ所ぶまこ
かまぶもるもあつてうぶやくこをうどきこのひをりふ事紀
まふやうしきぶ[illegible]ふてそ[illegible]なき相[illegible]

きるふぶ[illegible]ふ[illegible]ふてぶ何ぶ[illegible]ぶ[illegible]ふ相へ[illegible]ふ[illegible]ふ
なす紀ぶを[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ

ふ社をあそれなるぬ形ちなんさいまるあれどいと人
ちこせをとれらんざ死人下ごもちくちと死さい
ぢやうの情よりひいてるるもを成くるこで月こと身は
きこてよろぼのこのそれ事の つもるやうまがやあれやも
こやも色ぞそなくよくさけ事も事こそがうつろふん
ひ詠さらこのおしまけくの神ぞ事もふとあふそへて
をまくなる歳死と扶剪こそろうひーのん大ひぞの
法ひろとさへおとひあぞ法るやいでやおのこの身ぢん
言ふこと川よりおるへよひこことおぞるひつ八佛乃
法詠事事佛もはう字言をとこさ拍り給へば

うぞこそあさ法法樂事乎こといあうれしさるとも い稀
りの恋ちこそさまあるくちつさそとこ紀掛清の
くさうひあ死いそ法るこいてんとおさ会おとて行
くちさひ紙をもまこ数のくつ事をとてそく
こあまこ ぞるとおひ多りもんまこふ事よちづ八ふ歳
ひ神とはづるなるべしふ元こ社植よりうまてまうこと
事あこそるとを法年もひつるこで人く八月とのれ
とひこて月乃歌ま人ぞやおがす おのまこ八ふ安る人身
ま こて行ふ方八ちれるとやとはかふさこて おづすこめ
恵こいふ神を四世ふ事ちこふ事のこそむこふ事面を死人

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一番

左名主

右大屋

くぐりの門をたて世を作りて古き面形を月をしてそこれ
六つきりのうぐいすをしぶるまでうしぶるけくすの月新
左右の手に刺子六つ限の海老乃うぎを云
きん吏頗殘点して判者は職分はやうちん
事をいまし先仕るるれば殘れども
下のうるどう丸不なきまいあらばるべし左は悪者の
詠人門も死世を作ぐるど事やりて仕べし
そもそも歌合花の一番多くは勝るるはやれい
古製。小親王大長者人るどことあるゆえ行る人と
如房ぞやく俗名くこ一番乃左よする俗れい判者も

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右医者

作ぎみよ天の陰徳これるゝ人を霊ふ昧の秋ぢ月この者
久うゝ去月ぢうゝれ枝ちや木草の毒も汗ともち賢人
ゆうぢ乃ゝゝこと事、藏人の姿さるゆえ人あやん。
左右ゝ方ゝ判ゝ方ゝ虚霊ふ昧ゝ方ゝ
なきこと新信ゆるべゝれど一首乃姿ちゝ
くゝ沸ゝゝ。右月の様を桂枝ゝやゝ
ゝれゝゝこめゝゝ。後信へ。
我ひい赤坂をゝゝ方ゝ人ゝゝゝ人ゝゝぬゝ
ならゝゝゝ神ゝゝゝゝゝ屋藤の袋ゝ
右方ゝ方ゝゝゝゝゝゝゝ彼名ゝゝ

我しひたる物のよるまぬるのこれなり。左方申す。
判方左の方は雑さうなれども安ともきこえる。假名
づかひとなりぶふ安いろはなりこれは近来作者の職。
思うしぶこと実撃して皇國の事は行るも云ふ法
のこゝろかなべての物こゝろ付やこに結ぶ歩くの事い
ものさまなべくやをこの甲子は書といふ書と見侍る。
假名よはふしもるづむへくさまのこゝを云侍る。
山書ゝ世ゝろの人の作るりつぐいぐ人人は考えて見
給べし。濱ゝ濱ゝ思ふ物ゝ左は八雲御抄に。
亦悪いといひくゝまゝ書ゝ物ゝ云ふ上のこゝまで

とかゝぬ人の書さ云ふ乃ゝ左ゝて行くいの詞とゝさる事は
面しの出物ゝ来ゝ物ゝ云ぬ方の例ゝ云ふ詞ゝ引
のひまんを悪ゝ物ゝ左ゝ制しとゝむる事とゝ
か新撰しいうさまふも弄ゝ考ゝ遠ゝ心ゝ詞乃
禁長ゝ長るべゝさゝ人ゝて物ゝ古雑ゝ物ゝ仮ゝ
さうゝもゝいゝ詞むゝ倍ゝ倍ゝ今ゝ物ゝ物ゝ
右ゝ和漢のゝ物ゝ物ゝ結ゝ物ゝ物ゝ
古ゝいゝ物ゝ云ゝ物ゝ物ゝ
左のゝゝゝ既ゝ失ゝ詞ゝ右のゝ子ゝ
なれゝ物ゝ物ゝ物ゝ物ゝ物ゝ

三姑
九八卦見
卜筮

右人相見

山の端ふるまひ雲々筆木にて雖中断よりとく月新
月をうて今てらしかの天庭の黒雲紙いとかなしひるりとハ
右ふ雖ヤ　左申云天庭ハ黒雲をいとかなしく侍る
ときこえ侍りてハ有何る事なるべし　月ハ侍ふ
何ハ申ふ雖ヤ　左ハ雲判云て庭の黒雲ハ空乃
くもりとおもはれ侍るべしれどハ申ふ者たる歟
下ハ筆木おさてもねてもあるとおもはれ侍ひ
いまでおとなしいの　ふ雲のあるべて眼境を人ようにし
たいふ雖ヤ　左方ヤ云　たのうに感心判云
左ハ侍ふ方人ヤ状既有優劣

判者ハ仕ふまつる　以右ふ歟

四番
たゝちこ

五番
太頼人

ゆる物をもてるものゝ子こゝにまるすこゝて物ゝ物ゝ物ゝ物ゝ新
當日八十五歳なるゝ物ゝ物ゝひゝひの者ゝうゝ月ゝ者
右方ハ藏宗右方ハ當日八十五歳なるゝと
仕るゝ藏ゝ宗りてゝよゝなくゝや、ゝ陳ゝゝゝゝゝへゝ
當日ハ、ゝゝゝゝ三歳得大勢至菩薩ゝゝゝゝ
當日の佛神をゝゝゝ水行の者ゝ宗ゝ仕宗
判ゝゝたの歌ゝゝゝゝくゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ仕ゝ通ゝ物ゝゝゝゝゝゝゝ三の物ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ月ゝびのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

右願人

引とゝへてゝゝぬ世の物のあるねぬでよるや梓の弓ゆゝ
南時も十五年程あるゝし水引乃ひゝゝの書のようゝる月新
たゝたゝふ雑や刺ゝたゝるやゝいゝ羽ハゝゝあつめる
ゝゝゝゝ事あゝと職ゝゝひゝれゝの孫ゝてゝゝく
ゝゝ抜ゝるあるべし。陸奥巨難頗近里倍ゝハ
上の白字ゝ書ゝ化ゝていゝゝゝゝ

右 魚賣

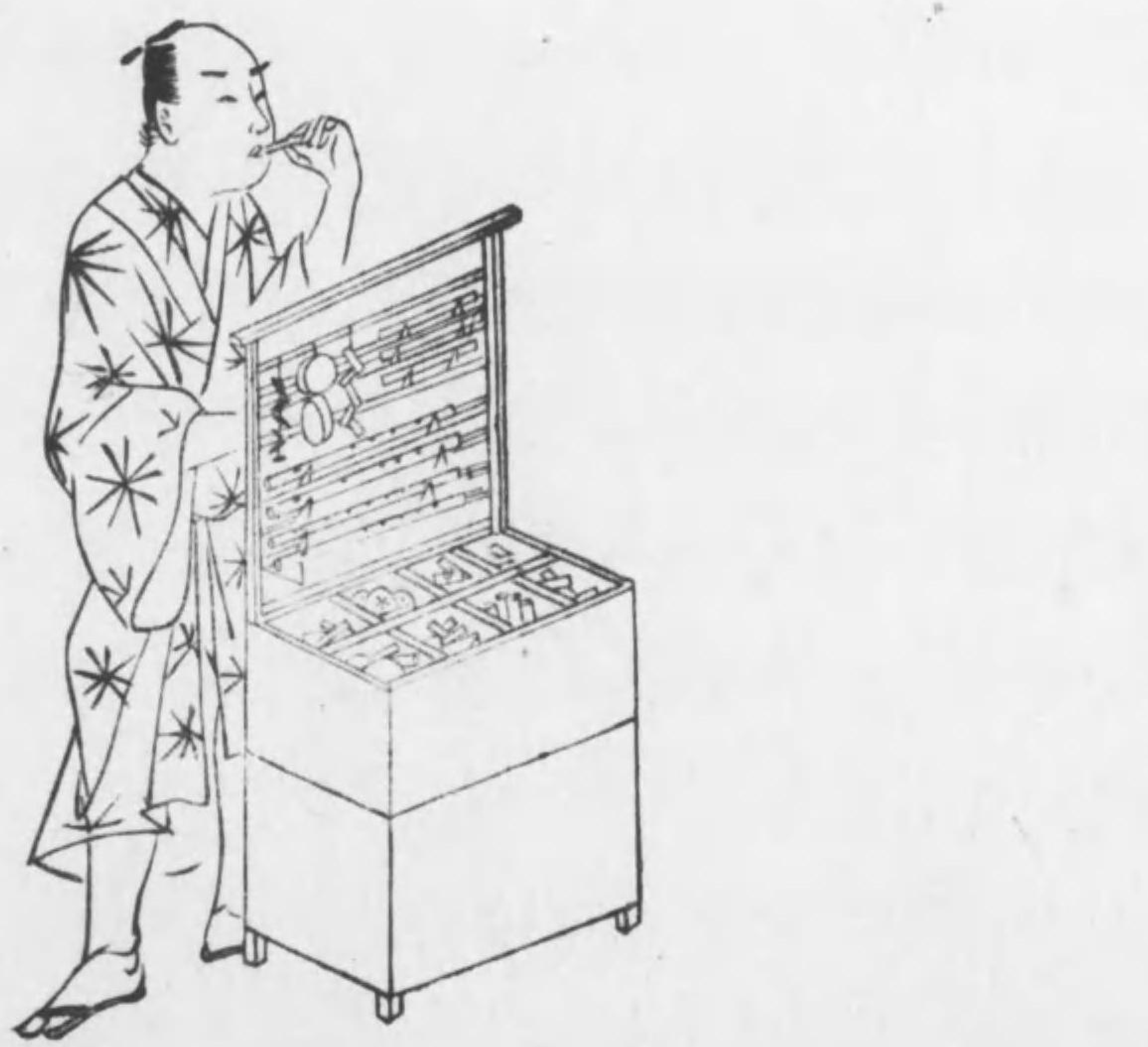
名をうるさ樂屋乃とちハ面で喜ばせやうそうる獲事無新
山の底ハうゑぬる月をこしもとなのハいをぶと祝まぶりうる
左右を番二判云たの秋深めよりく結べし
ちまで世上よ八月紙半ぶんなりし
結ぶや夏をもよりれうる出ぶしの事ずや
右を月をもしむ情婦うる結まうる物
帝毎ゝ伺首鳥自然暑預数のまで我とあるはげぶさう
乱ゝ月ぶで無しぶ夕汀岸ぶあぢぶなとうい野ひさ
太中与南ゝ左中云いぢうるゝ月ゝ同誠ゆ
いぢうるくや判云あぢ美なしやゝ月を代

六番

左 虫賣

左たまゆらのこゑ　さたの秋ふるさとに
ゆくとくいひてきれくはりうと　初句ぞ打聞め
作者めさて八作者ども　ゆかりとく八花と
以婦人　大切之自我者共作者員八作者
なほ名ゆ　秋鶯なん味ゆ　ちまて八作者共

右 笛賣



秋のよは何そと月にとはゞむしが答へる虫の音をきゝしもる

嫋え竹のよゐづき秋も更ぬれど撰みしの様くおもひ出るは

太方題の歳宗左中云みじかき様とは世銭にし

こしよぶに似ますの判云ふじの様乃中はむかし六百

番の謌合たりける母題昭左方もて笛様とあるより後ぞ

何ろやぬとよまる也太方難しやしと笛様乃やまとうたまう

よし換さなしやちつまれ笛様もとひく上より下まで

まさるはこの邪優よて殊ゆかれと昧じやしきまされば

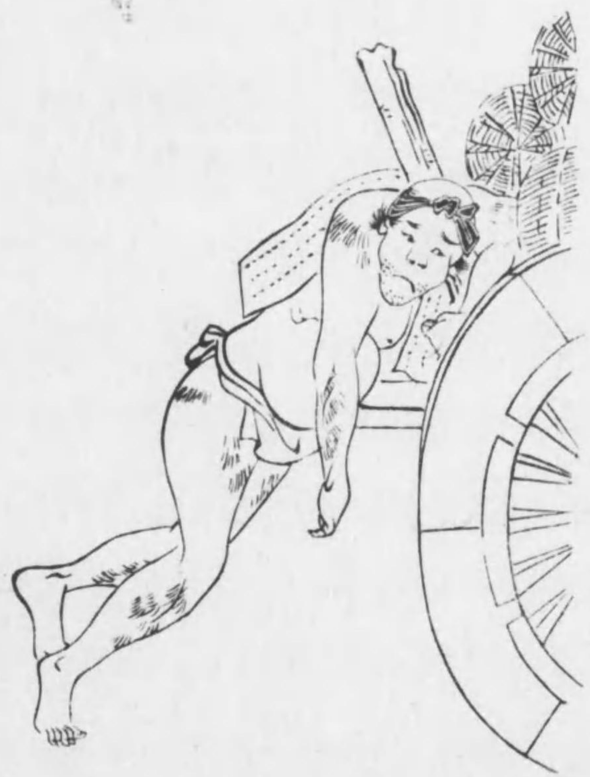
うさなしや古なし俊成卿傍ときこしおもへん賢既に

かしらだとし今更異論何るべうしだくかしき様とよめる

七番

左　馬方

右車引



田舍ゐなかの人さいくはくに綱のあぶら絞しぼり月よひかく燒
蓋てり桜木車寄しぐるや上若の旬ゑ藤
右中ゑ左方ゑ方ゑ指郷左申ゑ右ゑ鉄ゑ感ゑ
判ゑ左右のゆるまり勝て右ゑ勝と云申
くハ壁ゑ東ゑ乃ゑ弱と形まこハせぐふ清ゑ鉄ゑつゑ引ゑ
くれ木つゑちゑ車ゑ引ゑ紙ゑ中ゑ恵ゑ方ゑなり
左右又ゑ雑中ゑ判ゑ左右ゑ中ゑ弦ゑ寄
ゑ結ゑ中ゑ恵ゑ草ゑとゑ車ゑ七車ゑ結
古ゑとゑくゑ小ひ叶へ藤ゑ結ゑ郷ゑつなゑ引
せんゑるゑりゑとゑ車ゑ右ゑ云ゑ結

八番

左 呉服屋

右 あらきや

植田為那内為行　俳諧師

土手よりさかる柳の一葉ちるとそ見てとなれは枝なるを月ぞ見りける

左　右　持　藏人し史判云左植田為那内為行

色の染まふとりあまれる葉に氣限あり　右柳系

秋末さいつるより初秋の月のとりあまれる色又の色

藏左右ともふよ詠しきみやとして左を勝

あけてるく求やぐくとかりとてそをむ所那　右ハ

くるあるとこの世の秋の月頃平情なや右為へし

何つてへ秋萩をうゑ花をおもひあるあ秋の庭と　右ハ

詠つ多つ何つてて月をとる拾うゑゆくりと何をのおん

右　云左方何とやらんとそをぬやうなやたやら云

初句いのまりふ俗なる判云左方ゑれとけふ萩の

庭とくいふべうりきるとと問きそ多右方初句

こうやうなる世方合の学こうどもあきまやを

何初句をんなどけうしうやハ侍る左の萩具

天きそぬるつきあ　左為為

九郎
左衛門

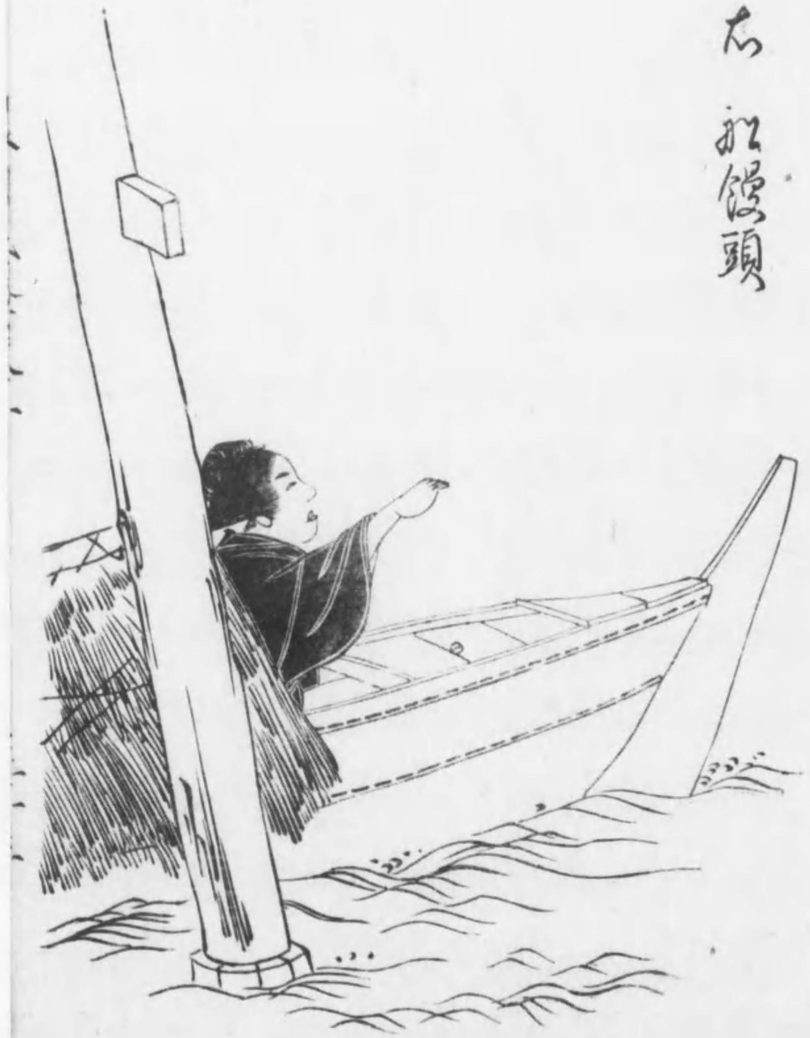
太鼓叩

切立ちの花の盛りも散りはてぬ　燈籠ぶせの蜂のよそおい
秋風に吹かれかねんよ元の雪　ちりはつるうるさいつ
左方　番　判　左方　秋の風情とつくれる
吉原の金盛りの姫たちの前　六月の速のうるる
浮雲の無つきて雨　左方勝
いふせん高ゆ　ゆ　ゆ　

十番

さゝ蔦雪

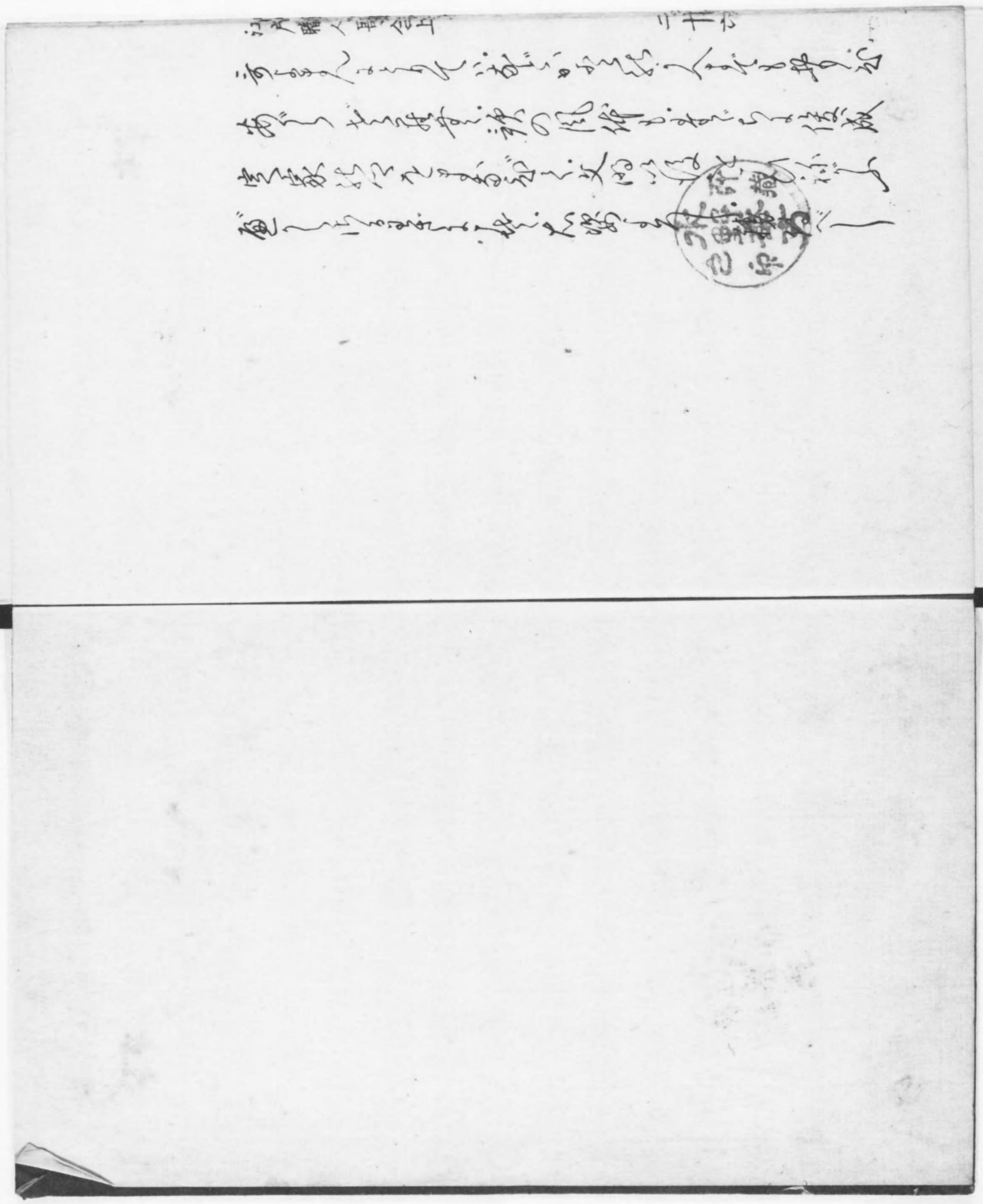
右 松饅頭



[illegible]

[illegible]

[illegible]



終